

音楽文化の先覚者

山下笛朗

木下淳子

「笛(テキ)さん」の愛称で呼ば

れていた山下笛朗氏は、明治三十六年大新町の旧家に生まれた。幼名尚次・後に佐助を襲名。笛朗はペンネームである。飛驒の

文学者福田夕咲氏の甥に当たり、音楽だけでなく、短歌・随筆等にも優れた文才を発揮している。

大正時代の高山では、音楽を学ぶことを、道楽という言葉で表現していた。笛朗氏が、音楽学校へ入ることは、親戚が猛烈に反対をしたが、父と福田夕咲氏の温かい理解により、音楽への道に進むことが出来た。

音楽への憧れは、小学校時代、唱歌を教えてくださった若い女の先生の弾くオルガンの音に魅せられた事、斐太中学校に入學した時、しまりやの祖母から尺八とヴァイオリンを買ってもらった事である。しかしそのヴァイオリンは、誤って壊してしまった。が、音楽への情熱は益々募り、音楽学校に進む決心をした。その動機は、父がストップ7個付きのオルガンを買ってくれたことである。

進学する意欲に燃えた笛朗氏は、先ず楽譜を読むことを学ばなければならぬ。しかし、大正七・八年頃高山に音楽を教えてくれる先生はいなかった。途方にくれていたところへ福田夕咲氏の紹介で、ようやく音楽学校へ入る手引きと読譜を習うことが出来た。

大正十一年東京音楽学校の入学試験をK氏と受けたが二人とも不合格。K氏は進路変更をしたが、笛朗氏は、初志貫徹と決

意は固く、苦難の多い道である音楽へ再び向かう決心をした。

ピアノを二台持ち、高山と東京に一台ずつ置き、東京音楽学校選科と日本高等音楽学校の二校に籍を置き、精進した。飛驒で初めての音楽学校卒業生である。日本音楽界のホープ木下保評論家の小松耕輔、作曲家の成田為三は恩師である。

在京七年、昭和六年中学校教員に音楽が正課として採用されたこの年、斐太中学校音楽教師として、教師のスタートをした。以来、戦時中(十六年〜十九年本巢高女)を除き、三十九年三月退職するまで斐太高校で、音楽指導に当たった。後、西高校の講師も勤めた。

一方、昭和八年長尾量平氏等と高山音楽連盟を結成し、以来活発な音楽活動を続けた。純音楽と大衆音楽を融和させ、現在の音楽諸団体の基礎を築いた。

また、忘れてならないのが「飛驒山娘」。吉村比呂詩作詞・山下笛朗作曲、三十五歳の時の作品。昭和十三年八月初演、同年十一月世界のプリマドンナ

三浦環が独唱会で、音楽連盟の伴奏で歌った。笛朗氏最高の喜びの日であった。

昭和五十二年五月「巖本真里弦楽四重奏団」のアンコール曲に、倉野昌三氏編曲の「飛驒山娘」が演奏され、素朴な情感が見事に表現され、感動的であった。笛朗氏にも聴いて欲しかった演奏であった。

その他にも福田夕咲氏とのコンビで、斐太中学校創立五十周年記念「斐中行進曲」・大名田町併合市政一周年祝賀「大高山市行進曲」音楽連盟創立十五周年記念連盟の歌「TMAの歌」等数多く作曲した。

昭和四十一年高山市民合唱団創立十周年記念行事として、城山如意ヶ丘に「飛驒山娘の歌碑」が建立され、永遠に吉村比呂詩氏・山下笛朗氏を顕彰するとともに、飛驒の人々の心の故郷の歌として、大切に保存されている。今でも毎年、新緑の美しい五月第二日曜日に、市民合唱団による歌碑祭が行われている。郷土の音楽家として、多数の名曲を残し、郷土音楽家の重鎮として、郷土音楽界の育成発展に多大の貢献をされた功労者である山下笛朗氏は、昭和四十八年八月一日六十九歳で他界された。



山下笛朗さん